

はじめに

毎年、多くの一般向けの『万葉集』関連の書籍が出版されており、また研究者が出版する『万葉集』関連の研究書もそれと同じく、いやそれ以上に多く出版されているのが現状である。ただし、一般向けの書籍の多くは、概説的な説明で終始されているのが典型で、それに反して研究者が出版する研究書は、一つの作品なり、一つの語句を微に入り細に入り、徹底的に分析するものが多い。また、研究書は、当然ながら自分の意見の正当性を徹底的に主張するものでもある。そのような「専門的すぎる」性格からも、それらは「専門書」という名のもと、価格的にもなかなかの代物でもある。

例年、大学で講義をしいて実感することは、一般的な書籍と専門的な研究書との間に位置するような、授業での講義等にテキストとして活用でき、また、一般の方々が、さらにもう一步深めて学ぶための『万葉集』テキストがあまりない、ということである。多くの万葉集研究者の先生方は、授業等では各自で作成されたレジュメやパワーポイントを活用しておられるであろうし、映像やビジュアルにも凝った個性的な資料を作成されているのだろうとも想像される。しかし、当然、それらが教員間で共有されることは、ほとんどないと言ってよい。

したがって、本書は、以上のような一般書と専門書との間に位置するようなテキスト（レジュメ形式の体裁）を提示するものである。『万葉集』の表面的な概説のみを示す一般書よりは、さらに一步深く考えてみたい、という方々に、かといって専門書のように一つの意見に執着するのではなく、自分なりに『万葉集』の歌々を考えてみる事ができるようなテキスト、おおげさに言えば、そのような書籍を考えているのである。どこかで聞いたことのある著名な『万葉集』の歌も、実は様々な「読み」（解釈）があり、一筋縄にはいかないことも多い。私も授業では、「どの解釈が正しいのだろう」「どう解釈したら良いのだろう」「分からない」の発言の連続であり、受講している学生はさぞ

戸惑っていることだろう。ただし、そのように、「読み」が定まらないからこそ、『万葉集』は、まだまだ研究の余地があるし、それも『万葉集』の魅力の一つでもあろう。

本書では、そのようなまだまだ「分らない」「問い」を実感していただけるような体裁になっている。本書は、『万葉集』の歌の中で、著名な歌を選びすぎり、それを十五の講座（歌・テーマ）として取り上げ、検討する。また目次的には古い時代の歌から新しい時代の歌へ（専門的には第一期から第四期へ）の配列にもなっている。そして、あえて全てを文章化するのではなく、多くの用例を並べ、さまざまな意見を簡潔に箇条書きで示し、さらに万葉歌が生み出されてくる実際の「場」を実感できるよう、多くの写真を羅列する、という体裁を取った。一つの講義を再現できるように「レジュメ形式」を使用してみた次第であり、そこからさまざまな方向に論が広がるように意識すると同時に、万葉歌の背景に広がる実際の「場」にも注視した。私自身、考古学や歴史学、また地理学から万葉歌を分析する必要性、万葉歌を実際に体感する必要性（万葉旅行）を重視しているからである。本十五講座という体裁は、大学の授業で考えるならば、一講座を一回の講義で半期分という体裁である。ただし、私の経験上、一つの講座は二・三回の授業にも広がりを持つはずであり、そのように考えれば、十分に一年以上の題材にもなるはずである。一つの講座からさらに新たな「問い」を導き出していただし、さらに、『万葉集』研究を深めていただければと期待するものである。

本書をなすにあたっては、毎年毎週の授業、この十年來の毎月のカルチャーセンターでの講義、その他、いろいろな場所で開催させていただいたことが核となっている。また、多くの著書、多くの研究書、さらに、多くの先生方からのご意見がもたれており、その点、本書では、それらの説の一つ一つについて、出典をあげられていないことも多い。「専門書」としての位置づけではないこともあり、その点にご寛恕賜り、逆にそのような多くの意見の積み重ねの上に、現在の『万葉集』の「読み」ができあがっていることを実感していただければ幸いである。

本十五講座が、皆さまの『万葉集』への入り口になり、さらには深みにもなり、また本書への「問い」にもなっていたら、甚幸である。

多角的に考える万葉集十五講

【目次】

第一講	万葉集巻頭歌から額田王の世界へ	1
第二講	大和三山の歌	29
第三講	歌木簡と万葉集	43
第四講	但馬皇女・穗積皇子歌群	57
第五講	柿本人麻呂「安騎野の歌」	73
補説	「訓む」から「読む」へ——「難訓歌」への挑戦——	89
第六講	高市黒人「羈旅歌八首」	97
第七講	山部赤人「神岳の歌」	111
第八講	大伴旅人「讃酒歌」——大宰府文学圏の世界——	131
第九講	山上憶良「貧窮問答歌」	147

第十講	高橋虫麻呂「浦嶋伝説歌」……………	163
第十一講	卷十五「遣新羅使人歌群」……………	181
第十二講	卷十六の「笑い」……………	203
第十三講	東歌・防人歌の世界……………	223
第十四講	大伴坂上郎女の贈答歌……………	263
第十五講	万葉集最後の歌―家持の願い―……………	281
歌索引	……………	302

凡例 本書における『万葉集』『古事記』『日本書紀』の引用は、基本的に『新編日本古典文学大系』(小学館)、『続日本紀』の引用は、『新日本古典文学大系』(岩波書店)による。また、掲載写真は、特に断りのない限り、著者撮影による。

第一講

万葉集卷頭歌から額田王の世界へ

一 『万葉集』とは

(1) 成立

『万葉集』は、現存する日本最古の和歌集で、二十巻からなり、約四五〇〇首の和歌を収めている。編者や成立年代の詳細は不明な点が多いが、成立は奈良時代後半であり、大伴家持が、編纂者の一人として考えられている。『万葉集』は段階的に成立していき（最初に成立したのは、一番歌から五三番歌までの「原撰部」、順次、補遺や増補によって、巻二十まで増幅していったと考えられる。『万葉集』の名義については、「万よろづの言ことの葉」説、「万代よろづよ（世）」説、「多くの詩華（葉）」説等、多くの説があるが、通説はない。

(2) 時代区分

詠作年代は、仁徳天皇から八世紀中ごろまでの約四五〇年間にわたっているが、舒明天皇（六二九年即位）より前の作には伝誦的な性格がつよい。舒明天皇以降は、通常以下の四期に分けられる。

- ① 第一期 舒明天皇（六七二年） 額田王・天智天皇・有間皇子
- ② 第二期 壬申の乱（七一〇年） 柿本人麻呂・持統天皇・大津皇子・高市黒人
- ③ 第三期 平城京遷都（七三三年） 山部赤人・大伴旅人・山上憶良・高橋虫麻呂
- ④ 第四期 天平六年（七五九年） 天平宝字三年 大伴家持・大伴坂上郎女・防人歌

(3) 歌の表記——「訓字主体表記」と「仮名書主体表記」——

- ① 東野炎立所見而反見為者月西渡

（巻1・四八）

↓ 第五講

- ② 淡海乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思努尔古所念 (巻3・二六六)
- ③ 妹為 菅実探 行吾 山路惑 此日暮 (巻7・一二五〇)
- ④ 春楊 葛山 発雲 立座 妹念 (巻11・二四五三)
- ⑤ 余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊与余麻須万須 加奈之可利家理 (巻5・七九三)
- ⑥ 新年乃始乃 波都波流能 家布敷流由伎能 伊夜之家餘其騰 (巻20・四五二六) ↓ 第十五講

・「訓字主体表記」…… 巻一、四、六、十三、十六
 ・「仮名書主体表記」…… 巻五、十四、十五、十七、二十

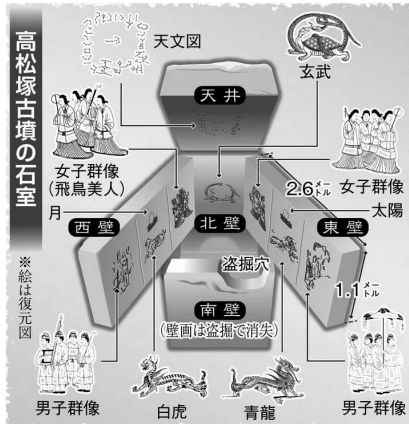
↓ 『万葉集』の基本的なことに關しては、坂本信幸・毛利正守編『万葉事始』(和泉書院・一九九五年)、上野誠・鉄野昌弘・村田右富実編『万葉集の基礎知識』(KADOKAWA・二〇二一年)参照。

(4) 戲書 ↓ 補説

- ① 「」の野の み草刈り茸ふき 宿れりし 宇治のみやこの 仮廬かりいほし思ほゆ (巻1・七)
- ② 金野乃 美草茸葺 屋杼礼里之 兔道乃宮子能 借五百穢所念
 我が恋を つまは知れるを 行く舟の 過ぎて来べしや 言も告げ「」 (巻10・一九九八)
- ③ 吾戀 孀者知遠 牲船乃 過而應来哉 事毛告火
 若草の 新手枕を まきそめて 夜をや隔てむ「」 あらなくに (巻11・二五四二)
- ④ 若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 二八十一不在國
 犬上いぬかみの 鳥籠とこの山なる 不知哉川 いさ「」 聞こせ 我が名告のらすな (巻11・二七二〇)
- 狗上之 鳥籠山尔有 不知也河 不知二五寸許瀬 余名告奈

水	金	土	火	木	(五行)
冬	秋	土用	夏	春	(五時)
黒	白	黄	赤	青	(五色)
北	西	中	南	東	(五方)

【資料1】(4) ①・② 陰陽五行説

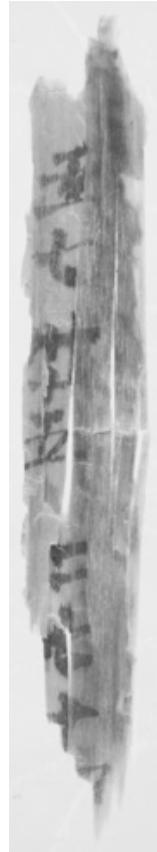


「高松塚古墳発掘 50年」
『産経新聞』2022年3月20日より
(産経新聞社提供 無断転載・複写不可)

- ⑤ 標結ひて 我が定め「住吉の浜の小松は 後も我が松
印結而 我定義之 住吉乃 浜乃小松者 後毛吾松
- ⑥ 世間は 常かくのみか 結び「白玉の緒の 絶ゆらく思へば
世間 常如是耳加 結大王 白玉之緒 絶楽思者
- ⑦ 宮材引く 泉の「立つ民の やむ時もなく 恋ひわたるかも
宮材引 泉之追馬喚犬二 立民乃 息時無 恋渡可聞
- ⑧ かくしてや なほやまもら「大荒木の 浮田の社の 標にあらなくに
如是為哉 猶八戌牛鳴 大荒木之 浮田之社之 標尔不有尔
- ⑨ たちねの 母が飼ふ蚕の 繭隠り「せくもあるか 妹に逢はずして
垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而
- (卷12・二九九一)
- (卷11・二八三九)
- (卷11・二六四五)
- (卷7・一三二二)
- (卷3・三九四)

【資料2】 (4) ③・④

奈良文化財研究所「木簡画像データベース 木簡庫」<https://mokkan.konabunken.go.jp/ja/>より



【資料3】 (4) ⑤・⑥ 王羲之『蘭亭序』

永和九年歲在癸丑暮春之初會

于會稽山陰之蘭亭脩禊事

也群賢畢至少長咸集此地

有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激

湍映帶左右引以為流觴曲水

列坐其次雖無絲竹管弦之

盛一觴一詠亦足以暢叙幽情

是日也天朗氣清惠風和暢

(略)

梅花の歌三十二首并せて序

天平二年正月十三日に、帥老（せうらう）の宅（たく）に萃（あつ）まりて、宴会をのべたり。

時に初春の令月にして氣淑（よ）く風和（やはら）く。梅は鏡前の粉（かみ）を披（ひら）き、蘭は珮後（ばいご）の

香を薫らす (略)

(卷5・八二五題詞)

二 卷頭歌の訓読ならびに現代語訳

雑歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代 大泊瀬稚武天皇

天皇御製歌

籠もよ み籠持ち 堀串もよ み堀串持ち この岡に 菜摘ます子 家告らせ 名告らさね そらみつ 大和の国
は おしなべて 我れこそ居れ しきなべて 我れこそいませ 我こそは 告らめ 家をも名をも (巻1・1)

(現代語訳)

おお、籠よ、立派な籠を持って、おお籠よ、立派な籠を持って、この岡で、菜を摘んでおいでの娘さんよ。あなたの家をおっしゃい、名前をおっしゃいよ。靈威満ち溢れる、この大和の国は、隅々までこのわたしが平らげているのだ。果てしもなくこのわたしが治めているのだ。よし、わたしの方から先に打ち明けようか、家も名前も。

① 雑歌……「相聞」「挽歌」と並ぶ万葉三大部立の一つ。「相聞」が私的な性格、特に男女関係の歌、「挽歌」が死者の魂を鎮める歌であるのに対し、「雑歌」は、野遊・国見・遊獵・行幸・宴遊・遷都など、天皇とその周辺の宮廷生活における公的行事の歌を収める。

② 泊瀬朝倉宮御宇天皇代……標目Ⅱ歌が制作された天皇代を示すものを指す。卷三以下にはない。

③ 大泊瀬稚武天皇……下注Ⅱ標目や題詞などの下に、後人が、小字で書き入れた注記のこと。

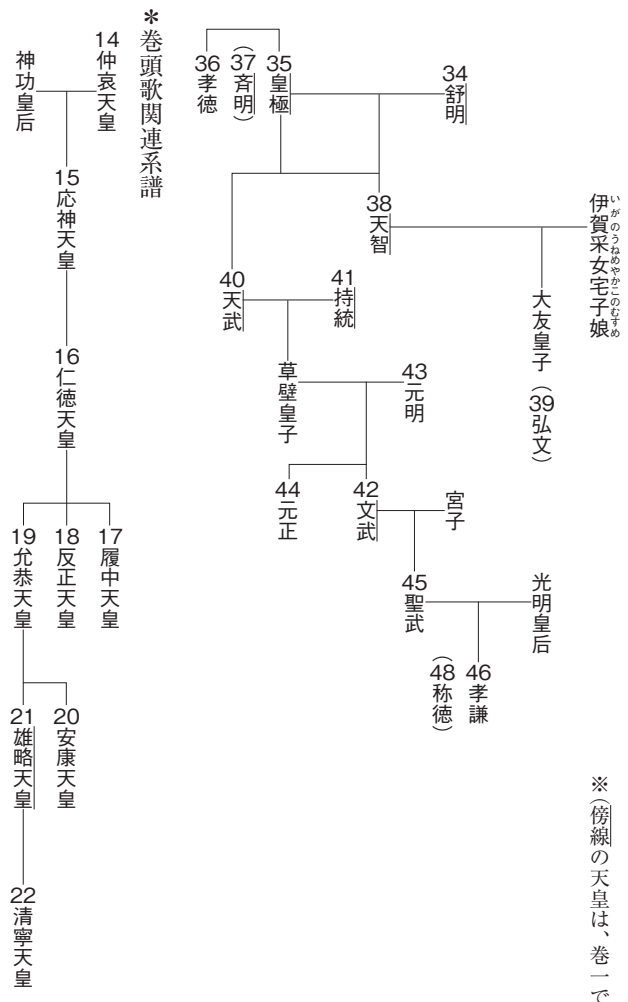
④ 天皇御製歌……題詞Ⅱ歌の前に置かれた「作者」「制作時期」「制作事情」などを、漢文で記したもの。

* 平安時代以降の和歌集については、通例「詞書」と呼ぶ。



桜井市にある白山神社内
「萬葉集發燿讚仰碑」

三 『万葉集』巻一標目の意義



・『万葉集』巻一の標目は、巻一が舒明天皇を父祖として、皇極・齐明天皇・天智天皇・天武天皇、そして持統天

※(傍線の天皇は、巻一で標目の立てられている天皇)

皇・文武天皇へと皇位がまっすぐに受け継がれてきたという「皇統」の歴史が描かれている。

・『万葉集』巻一（雑歌）・二（相聞・挽歌）の位置づけ

……『舒明皇統歌集』（伊藤博『萬葉集の構造と成立上・下』塙書房・一九七四年）

「天武・持統皇統歌集」〔品田悦一『万葉集のたくらみ』KADOKAWA・二〇一五年）

四 雄略天皇とは

・雄略天皇……

『日本書紀』では第二十一代で、大泊瀬幼武天皇と表記し、『古事記』では大長谷若建命と表記する。允恭天皇第五子。母は忍坂大中姬命。兄の安康天皇が眉弼王に暗殺されると、王と王を保護した葛城・田大臣を攻め殺し、また兄の黒彦・白彦、従兄弟の市辺押磐・御馬の諸皇子ら、皇位継承候補をみな殺して泊瀬朝倉宮に即位したという。記紀は、このほか葛城の一言主神との交渉や数多くの求婚伝説を伝えるが、比較的長期の在位中に葛城氏をはじめ、大和・河内の諸豪族を制圧して政略結婚を要求したと思われ、『日本書紀』には吉備氏も征服して南朝鮮に出兵し中国の南朝へも遣使したとある。中国側の諸史料にみえる、いわゆる倭の五王の最後の武王が雄略にあたりとされ、『宋書』の夷蛮伝が引用する四七八年の上表文からは、南朝鮮での倭の權益維持が困難だった状況がうかがえる。さらに、昭和五十三年（一九七八）に解説された埼玉県の稲荷山古墳の鉄剣銘では、雄略在世中の「辛亥（四七一）年」当時に「獲加多支鹵大王」と記されていたことがわかり、熊本県の江田船山古墳の太刀銘も同様に解説されて、一部には異説もあるものの、五世紀後半雄略時代の大和政権の勢力は、関東から九州にまで及んでいたと推測されるに至った。なお『万葉集』巻頭の歌が雄略御製とされていることなどを指摘して、雄略朝は日本古代の画期として後



さきたま古墳群内 稲荷山古墳



さきたま古墳群内丸墓山古墳から眺める富士山

(裏一部)



(略) 世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケルの大
王の寺シキの宮に在る時、吾、天下
を左治し(以下略)

(表)



○稲荷山古墳出土鉄剣銘(所有・国〔文化庁保管〕、「埼玉県立さきたま史跡の博物館」提供)

世に記憶されたとの説もある。

(『国史大辞典』参照)

五 伝承から見る雄略天皇像

天皇遊び行でまして、美和河に至りましし時、河の辺に衣洗へる童女有りき。其の容姿甚麗しかりき。天皇其の童女に問ひたまひしく、「汝は誰が子ぞ」ととひたまへば、答へて白ししく、「己が名は引田部の赤猪子と謂ふぞ」とまをしき。爾に詔らしめたまひしく、「汝は夫に嫁はざれ。今喚してむ」とのらしめたまひて、宮に還り坐しき。故、其の赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を経ぬ。是に赤猪子以為ひけらく、「命を望ぎし間に、己に多き年を経て、姿体瘦せ奏え、更に持む所無し。然れども待ちし情を躑さずては、恨きに忍びず」とおもひて、百取の机代物を持たしめて、参出て貢獻りき。然るに天皇、既に先に命りたまひし事を忘らして、其の赤猪子に問ひて曰りたまひしく、「汝は誰が老女ぞ。何由以参来つる」とのりたまひき。爾に赤猪子、答へて白ししく、「其の年の其の月、天皇の命を被りて、大命を仰ぎ待ちて、今日に至るまで八十歳を経ぬ。今は容姿既に老いて、更に持む所無し。然れども己が志を躑し白さむとして参出しにこそ」とまをしき。是に天皇、大く驚きて、「吾は既に先の事を忘れつ。然るに汝は志を守り命を待ちて、徒に盛りの年を過ぐしし、是れ甚愛く悲し」とのりたまひて、心の裏に婚むと欲ほせども、其の極めて老いしを憚りて、婚をえ成さぬことをいたみたまひて、御歌を賜ひき。

〔古事記〕下巻 雄略天皇条

少子部の栖輕は、泊瀬の朝倉の宮に、二十三年天の下治めたまひし雄略天皇大泊瀬稚武の天皇と謂すの隨身にして、肺肺の侍者なりき。天皇、磐余の宮に住みたまひし時に、天皇、后と大安殿に寝て婚合したまへる時に、栖輕知らずして参り入りき。天皇恥ぢて輟みぬ。

時に当りて、空に電鳴りき。即ち天皇、栖輕に勅して詔はく、「汝、鳴雷を請け奉らむや」とのたまふ。答へ

て白さく、「請けまつらむ」とまうす。天皇詔言はく、「爾らば汝請け奉れ」とのたまふ。栖輕勅を奉りて宮より罷り出づ。緋の纓を額に著け、赤き幡棒を擎けて、馬に乗り、阿倍の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往きぬ。輕の諸越の衢に至り、叫囁びて請けて言さく、「天の鳴電神、天皇請け呼び奉る云々」とまうす。然して此より馬を還して走りて言さく、「電神と雖も、何の故にか天皇の請けを聞かざらむ」とまうす。走り還る時に、豊浦寺と飯岡との間に、鳴電落ちて在り。栖輕みて神司を呼び、輦籠に入れて大宮に持ち向ひ、天皇に奏して言さく、「電神を請け奉れり」とまうす。時に電、光を放ち明り炫けり。天皇見て恐り偉しく幣帛を進り、落ちし処に返さしめたまひきと者へり。今に電の岡と呼ぶ。古京の少治田の宮の北に在りと者へり。

然る後時に、栖輕卒せぬ。天皇勅して七日七夜留めたまひ、彼が忠信を詠ひ、電の落ちし同じ処に彼の墓を作りたまひき。永く碑文の柱を立てて言はく、「電を取りし栖輕が墓なり」といへり。此の電、悪み怨みて鳴り落ち、碑文の柱を踊る践み、彼の柱の析けし間に、電操りて捕へらゆ。天皇、聞して電を放ちしに死なず。電慌れて七日七夜留まりて在りき。天皇の勅使、碑文の柱を樹てて言はく、「生きても死にても電を捕れる栖輕が墓なり」といひき。所謂古時、名づけて電の岡と為ふ語の本、是れなり。

（『日本靈異記』「雷を捉ふる縁 第一」）

【まとめ】

巻頭歌は、日本古代の画期としての大和の王者・雄略天皇の成婚を示す、たいへんめでたい歌と捉えられる。古代において、結婚は、ただちに子孫の繁栄や豊かな生産の予祝を意味した。当該歌は、天皇とその土地の娘との結婚を意味しているが、それは、その土地が、大きく栄えることをも意味する。また、当該歌の音教律は、3・4・5・6と、順次リズムがせり上がる形式を持ち、これは、万物の萌え出る季節である「春」という当該歌の設定、また、歌全体の生氣に満ちている状況とも密接に結びつく。そのような意味で、当該歌は、『万葉集』巻頭を飾るのにふさわしい歌と言える。

七 皇極天皇時代の額田王

明日香の川原の宮に天の下知らしめす天皇の代

天豊財重日足姫天皇

額田王の歌 いまだ詳らかならず

秋の野の み草刈り葺き 宿れりし 宇治のみやこの 飯廬し思ほゆ

(巻1・七)

金野乃 美草葺葺 屋杼礼里之 兔道乃宮子能 借五百磯所念

右、山上憶良大夫が類聚歌林に檢すに、曰く、「一書に、戊申の年、比良宮に幸せるときの大御歌」と

いふ。ただし、紀には「五年の春の正月己卯の朔の辛巳に、天皇紀伊の温泉より至ります。三月戊

寅の朔に、天皇吉野の宮に幸して肆宴したまふ。庚辰の日に、天皇近江の比良の浦に幸す」といふ。

(現代語訳)

秋の野のみ草を刈り取って屋根を葺き、旅宿り
をした宇治の飯宮、あの宮どころの、飯の廬が
思われる。



伝飛鳥板蓋宮跡 (皇極天皇・斉明天皇の宮)

※飛鳥浄御原宮跡 (天武天皇の宮)



飛鳥川原宮跡 (川原寺)

〔1〕 題詞と左注との矛盾

〔標題〕 明日香の川原の宮に天の下知らしめす天皇の代……皇極天皇

〔題詞ならびに下注〕 作者をめぐる異伝が存在することを、編者が意識していたことを窺わせる。

〔左注〕

・『類聚歌林』は、山上憶良の編纂した歌集。『万葉集』の左注に九箇所引用されるのみで、原本は伝わっていない。左注における引用は、一例を除き、巻一・二に限られており、それらの注記を持つ歌は、全て皇室関係の歌である。東宮侍講（聖武天皇の皇子時代）であった憶良が、作成した教材だった可能性を推定する研究者もいる。

・額田王には、作者の異伝注記がなされている場合が少なくない。当該歌のみならず、八・十七・十八番歌には、『類聚歌林』を引用した注記が付されている。さらに、異伝においては、天皇あるいはそれに準ずる人物が作者とされている。

● 「額田王作歌説」(題詞)と、「天皇御製歌説(大御歌)」(左注)との矛盾

↓ 額田王代作歌人説

(2) 歌の解釈

・額田王が、皇極天皇の意を汲んで詠んだ歌と捉えられる。想起されているのは、舒明天皇行幸時のことであり、かつて夫と行幸をともにした宇治の地に再び立ち、追憶を深めるとともに、大きな感慨を覚えたことであろう。額田王は、その感動を皇極天皇に代わって詠みあげたと考えられる。

・み草……ススキのこと。ミはそれが神のものであることをあらわす接頭辞。

・野……もともと人がたやすく足を踏み入れてはならない神の領域であり、そこに生えるススキも異世界のもの

であり、神の許しを得てはじめて刈りいれることができた、との説もある。

・宇治……宇治は、近江への道筋にあたる土地。行幸に際してはそこに、行宮が設けられた。

・思ほゆ……「思ほゆ」で結んだ回想の歌の最古の例。

●「飯廬」ではあっても、祝福すべき宮が宇治の地に生まれたことになる。讚美の対象として絶対化されている。

【まとめ】

舒明朝の行幸という体験を共にし、追想することができ、またその感動を共有することができ皇極天皇の身近にいたものこそが詠むことのできた回想であろう。単に「代作」というだけではなく、皇極天皇との思いを共有する人々の代表として、それらの思いを代弁するところが、当該歌の本質であろう。

八 齐明天皇時代の額田王―熟田津の歌―

(一) 訓読ならびに現代語訳

後の岡本の宮に天の下知らしめす天皇の代 天豊財重日足姫天皇、後に後の岡本の宮に即位したまふ

額田王の歌

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

(巻1・八番)

右は、山上憶良大夫が類聚歌林に檢すに曰はく、「飛鳥の岡本宮に天の下知らしめす天皇の元年己丑の、九年丁酉の十二月己巳の朔の壬午に、天皇・太后、伊予の湯の宮に幸す。後の岡本の宮に天の下知らしめす天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅に、御船西つかたに征き、始めて海路に就く。庚戌に、御船伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日のなほし存れる物を御覽して、その時にたちま

ちに感愛の情を起したまふ。この故によりて歌詠を製りて哀傷しびたまふ」といふ。すなはち、この歌は天皇の御製なり。ただし、額田王が歌は別に四首あり。

(現代語訳)

熟田津から船出しようとする月の出を待っていると、待ち望んだとおり、月も出、潮の流れもちょうどよい具合になった。さあ、今こそ漕ぎ出そうぞ。

(2) 歴史的背景

- ・ 斉明六年（六六〇）の七月に、百済が滅亡という、東アジア諸国の情勢に大きな影響を与える出来事が起きた。さっそく、朝廷は翌年の斉明七年、百済救援のために、朝鮮半島への派兵を決意。倭国の船団は、斉明七年（六六一）の一月六日、難波津を出航し、九州へ向かった。一月十四日には、伊予の熟田津の石湯（道後温泉）に到着、三月二十五日に那の大津（博多）に着いた。
- ・ この船団には、斉明天皇以下、中大兄皇子（天智）・大海人皇子（天武）、鸕野讚良皇女（持統）など、朝廷中枢のほとんどが参加する大規模なものであり、額田王も同船していた。
- ・ この熟田津とは、現在の愛媛県松山市の辺りに存在していた港だと考えられている。この場所で額田王は、出航を促す、当該歌を詠んでいる。
- ・ 一行が博多湾に到着してから四か月後、斉明天皇が崩御する。中大兄皇子（後の天智天皇）は称制して百済に出兵した。天智二年（六六三）の八月に、白村江に到着した倭・百済連合軍は、唐・新羅連合軍と激突したが、開戦からわずか十日あまりで大敗を喫してしまう。敗走する倭軍は、各地で転戦中の兵士および亡命を希望する百済の遺民を結集して帰国。国を防御するために、各地に朝鮮式の水城や山城を築く。

〔長い熟田津滞在と夜の船出〕

*夜の船出……直木孝次郎『夜の船出』（塙書房・一九八五年）参照

・1/6 難波出港

・1/14 熟田津着……通常コースとは異なる。

長い熟田津滞在

齊明天皇の静養（六七歳）

大田皇女の療養

大規模な外征による人と物との徴発

・3/25 那の天津（博多）着

・3/17~23 大潮……船出に適する

*3/17 月の出 午後八時二十分

満潮 午後十時三十分

*3/18 月の出 午後九時二十分

満潮 午後十一時十一分

*天皇一行の乗った船が、大伯おおくの海の上（現・岡山県瀬戸内市（旧邑久郡）の沿岸）を通過している時に、大田皇女（鷗野讚良皇女の姉）が大伯皇女を出産。



牽牛子塚古墳（齊明天皇陵）と
越塚御門古墳（大田皇女陵）



天豊財重日足姫天皇（齊明天皇）と間人皇女とを小市岡上陵に合せ葬せり。是の日に、皇孫大田皇女を、陵の前の墓に葬す。

〔日本書紀〕天智天皇六年（六六七）条

【まとめ】

当該歌は、白村江の戦いの直前、人と物との徴発のための長い熟田津滞在を終え、今まさに熟田津を起航しようとした際に、齊明天皇になり代わり、額田王が詠んだものと推測できる。齊明天皇を筆頭に、船団にいる人々の思い・覚悟が当該歌に託されているのだろう。瀬戸内海における夜の船出は、夜間の陸風（陸から海に向けての風）と瀬戸内海の潮の流れを熟知していた当時の人々の航海術が背景に垣間見られる。

